

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : _____ 竹田市 _____

1. 事業実施の目的

<事業実施の目的>

◎事業実施の目的

小規模の自治体において、持続的・発展的な架け橋期のカリキュラムを開発する仕組みをどのようにして構築するか。

◎竹田市の課題

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が策定されたが、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善あるいは幼保小の連携の手がかりとして十分機能していない。
- ・スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない。連携が行事の交流等にとどまっている。

◎課題解決に向けて

「竹田市架け橋期のカリキュラム開発会議」を組織し、カリキュラム開発方針の決定や実施状況の把握・検証、カリキュラム開発の支援等をおこなう。2年目に「期待する子ども像」や幼児教育（5歳）と小学校教育（小学校1年）をつなぐ「育みたい資質・能力」等をもとに、カリキュラム案（竹田市版、南部幼小モデル案）を作成した。それを参考に、全幼児教育施設および小学校でカリキュラムを作成し、実施検証を進めていく。

小学校および幼児教育施設は、小学校区（隣接する校区で合同開催も可）ごとに合同研修会を開催し、各園・校のカリキュラム案の検証を行う。開発会議は、この校区ごとの合同研修会の支援を行いながら、実施状況の把握・検証をしていく。

なお、本事業の取組については、大分県と連携しながら進めていく。具体的には、大分県教育庁幼児教育センター配置の幼児教育スーパーバイザーの派遣により、教材開発・実践に対する支援、カリキュラムの作成・活用への支援を受ける。教材開発のプロセスや実践事例及び作成したカリキュラムのモデル案等については、大分県幼児教育センターより県全域に還流されることで、事業成果の普及に寄与したい。また、研究の成果を冊子にまとめ、県内を中心に共有していきたい。

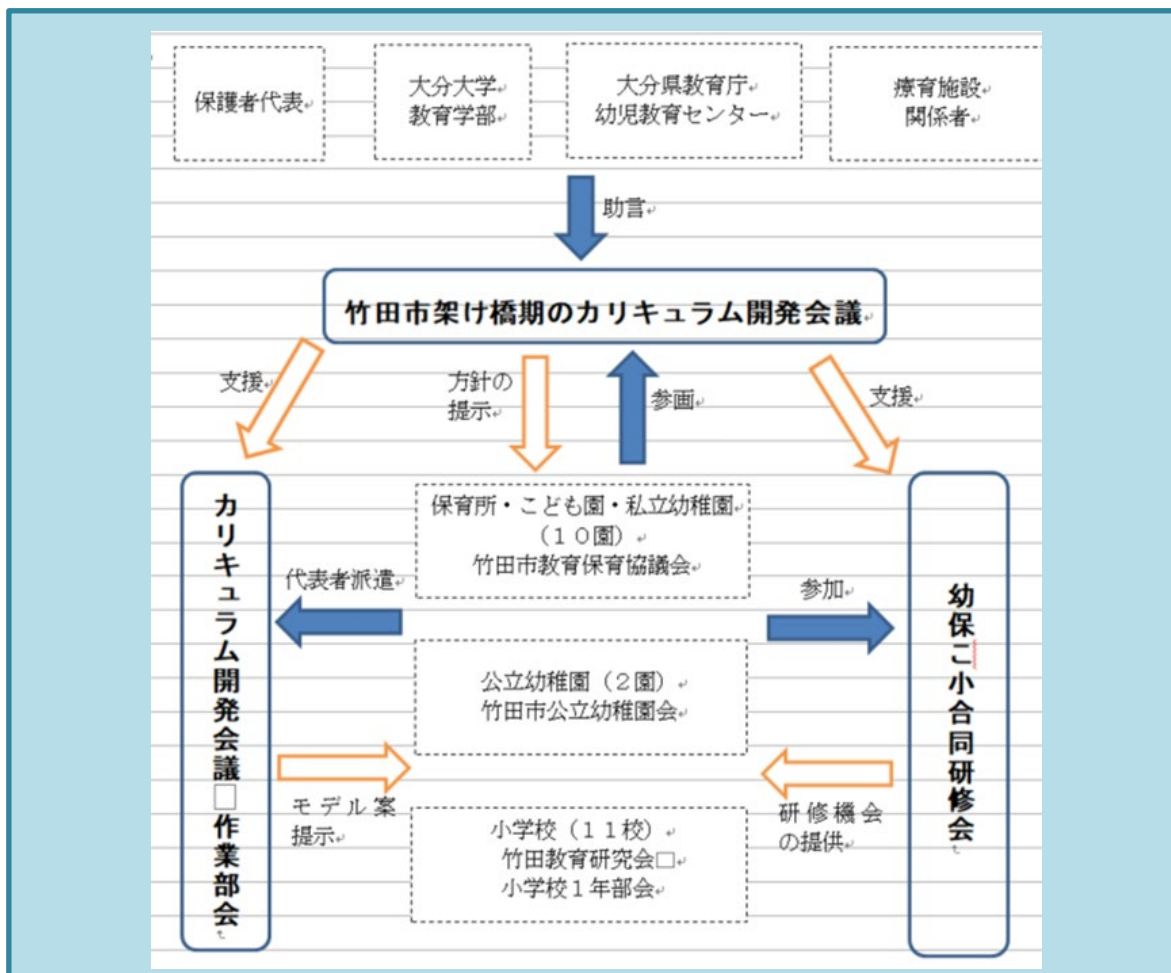
<園・小学校の施設数等>

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	2	1	2	5			0	11	0
園児・ 児童数	0	29	31	81	207			0	696	0

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

<組織図・体制図>



(竹田市架け橋期のカリキュラム開発会議)

大学教授、大分県幼児教育センター、県幼児教育スーパーバイザー、保護者、作業療法士、小学校校長、幼稚園園長といった有識者で構成。

架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

・第1作業部会

架け橋コーディネーター、小学校1年担任、幼稚園担任、園長、指導主事で構成。架け橋期のカリキュラムの具体化を行う実務的な会議体。

・第2作業部会

作業療法士、副園長、指導主事といった有識者で構成。架け橋期の体づくりについて具体的な活動を提案する実務的な会議体

<体制づくりの進め方>

○主担当：学校教育課

○連携先：社会福祉課 子育て世代包括支援センター（現：こども家庭センター）

○モデル園：南部幼稚園、モデル校：南部小学校を指定

○令和4年6月：第1回カリキュラム開発会議（委員の委嘱）

※子供に関わる様々な立場の人を招集

- ・ 大学教授、県幼児教育センター、県幼児教育スーパーバイザー、作業療法士
- ・ 小学校校長、幼児教育施設園長、市幼児教育アドバイザー、小学校教諭、幼稚園教諭
- ・ 保護者
- ・ （事務局）学校教育課、社会福祉課

（確認事項）

- ・ 架け橋プログラムの概要の説明、竹田市の現状・課題
- ・ 今後の予定・方向性

2-2. 協力園・協力校

<協力園・協力校の概要>

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園校のグループ
公立	幼稚園	竹田市立南部幼稚園	5歳児 13名	
公立	小学校	竹田市立南部小学校	1年生 29名	

令和3年度公立小学校等幼児教育施設研修の成果を活用するため、その実績を基に協力校（南部小学校）を指定し、協力校へ研修修了した教諭を派遣した。その接続に係る園（南部幼稚園）を協力園に指定して研究を進めた。

2年目に協力園の保育参観、協力校の授業参観および協議に市内の全幼児教育施設と全小学校に参加を促し、架け橋期のカリキュラムについて周知していった。

<自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組>

協力園と協力校については、カリキュラム案作成、2年目、3年目の保育参観及び授業参観を行った。その際、保育や授業の案作成などを作業部会として実施し、県の架け橋コーディネーターと市の指導主事が共同で作業を進めていった。実施後も検証及び修正を一緒に行った。

日程調整がうまくいかなかったが、オンラインの会議や架け橋コーディネーターの役割分担を行うことでスムーズに進めることができた。

<協力園と協力校同士の連携・協働の取組>

協力園と協力校については、園長と副園長が兼任していることで情報の共有はできていた。その中でお互いの教育課程を理解するために保育参観や授業参観を進めていた。しかし、お互い医を見る時間がなかなか作れないでいたが、保育参観期間として1週間設定し、校内体制の調整で空き時間をつくり、職員が参観できる体制づくりをすすめていった

2－3．協力団体等

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
竹田市教育保育協議会	保育所・認定こども園・私立幼稚園で組織する研究組織
竹田市公立幼稚園会	公立幼稚園で組織する研究組織
竹田教育研究会	小中学校で組織する研究組織 小学校には学年別の部会が組織されている

<各協力団体等との連携>

どの団体に対しても、架け橋期のカリキュラムについて周知を図っていったが特徴的な取り組みとして。

○竹田市教育保育協議会

竹田市幼児教育アドバイザーを中心に保育参観を企画し、指導主事を招聘して、子供の姿を基にした研究協議や架け橋期に期待する子ども像についてのワークショップを行った。また、保育士に対しての研修については、土曜日の午後や夕方に企画しながら周知を図った。

○竹田市立公立幼稚園会

年3回の研修会では、架け橋期のカリキュラムの作成・検証について研究テーマとし、保育参観やレポート作成を通じて、理解を深めていった。

○竹田教育研究会

小学校1年生部会を組織し、スタートカリキュラムの検討・改善をおこなった。また、1年担任を校内幼小連携担当として任命し、主体的な取り組みを進めるとともに、情報の共有を図った。

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった 年度	役職名	経歴
新規	令和４～６年度	架け橋期のコーディネーター	元公立小学校長、大分大学 教育学部附属幼稚園長

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

架け橋期のコーディネーター：大分県幼児教育センター スーパーバイザー

大分県幼児教育センター スーパーバイザーをカリキュラム開発会議委員として任命。竹田市架け橋期のコーディネーターとして第１作業部会を担当。開発会議において、架け橋プログラムの概要説明や今後の取組について説明をしていった。

その後、モデル園・校の保育・授業づくりについて、常に相談にのり、日常的に遊びや学びについて担任に示唆を与えていた。その中で、小学校１年担任と幼稚園担任が架け橋期のカリキュラムについて理解を深めるとともに、日常的に連携が取れるようになっていた。

各地区での合同研修会の際には大学教授とともに、参加し概要説明やワークショップを通じて、架け橋プログラムについて広めていった。

保育、授業参観に参加する姿勢についてのワークショップでは、それを事後の協議とつなげて、教職員の園児児童の見取る力を向上させたことが特に秀逸であった。

３． 架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１． 会議委員等

<会議委員一覧>

会議の代表者氏名		加藤陽一・吉岡次郎	他１８名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
志賀 哲哉	教育長		令和４年４月～７年３月
加藤 陽一	南部小学校 校長	座長 モデル園長、モデル校長	令和４年４月～５年３月
吉岡 次郎	南部小学校 校長	座長 モデル園長、モデル校長	令和５年４月～７年３月
麻生 良太	大分大学教育学部教授	指導助言	令和４年４月～７年３月
小林 里絵	大分県教育庁幼児教育 センター 主幹	指導助言 第１作業部会	令和４年４月～６年３月
眞田 貴弘	大分県教育庁幼児教育 センター 課長補佐	指導助言	令和６年４月～７年３月
武津 智美	大分県教育庁幼児教育 センタースーパーバイ ザー	指導助言 第１作業部会	令和４年４月～７年３月
阿部 優樹	保護者	指導助言	令和４年４月～７年３月
古澤 尊士	保護者	指導助言	令和４年４月～７年３月
森 ひろみ	荻げんきこども園 園 長	モデル園 園長	令和４年４月～５年３月
甲斐 美紀	なおいりこども園 園 長	竹田市幼児教育アドバイザー	令和５年４月～７年３月
工藤 智子	都野保育所 所長	竹田市幼児教育アドバイザー	令和４年４月～５年３月
伊井 雪江	竹田保育所 所長	竹田市幼児教育アドバイザー	令和５年４月～７年３月
吉岡 洋子	しらゆり幼稚園 園長	指導助言	令和５年４月～７年３月
猪股 良継	都野小学校校長（元指 導主事）	第２作業部会 指導助言	令和４年４月～７年３月
釘宮 公美	南部小学校 教諭	第１作業部会	令和４年４月～７年３月
吉野由希子	南部幼稚園 主幹教諭	第１作業部会	令和４年４月～７年３月
兒玉 敬祐	どんぐりの杜クリニッ ク作業療法士 ビジョ ントレーナー	第２作業部会	令和４年４月～７年３月
永井 知佳	府内大橋こどもクリニ ック作業療法士	第２作業部会	令和４年４月～７年３月
後藤いずみ	社会福祉課 課長		令和４年４月～７年３月
渡邊 早苗	学校教育課課長		令和４年４月～５年３月
渡邊 幸美	学校教育課課長		令和５年４月～７年３月
森 淳史	こども家庭センター係 長		令和４年４月～６年３月

小川 南	こども家庭センター主査		令和4年4月～7年3月
田辺 秀樹	学校教育課 指導主事		令和5年4月～7年3月

＜会議委員の決定プロセス＞

子供に関わる様々な立場の人を選出し、新設した

（開発会議委員）

- ・ 有識者：大学教授、幼児教育センター スーパーバイザー
- ・ 保護者代表：公立幼稚園保護者、私立幼稚園保護者
- ・ 作業療法士
- ・ 小学校：校長、教諭
- ・ 幼児教育施設：公立幼稚園園長、公立保育所所長、私立幼稚園園長、幼稚園教諭
- ・ 竹田市幼児教育アドバイザー
- ・ 行政機関：社会福祉課長、学校教育課長、指導主事

※モデル園長（校長）を座長として運営

3-2. 開催実績

<開催実績>

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
6月27日 15時～16時30分	・本事業およびカリキュラム開発会議の役割の確認 ・竹田市の現状・課題 ・調査研究計画	開発会議の委員を委嘱し、作業部会を2つ組織することを決定。年間計画を決定
9月27日 15時～16時30分	・作業部会の進捗状況 ・研究会の内容について ・今後の予定	竹田市の実態の交流。目指す子ども像について検討。・研修会を実施し、双方の教育（保育）理解を深めていく事が重要

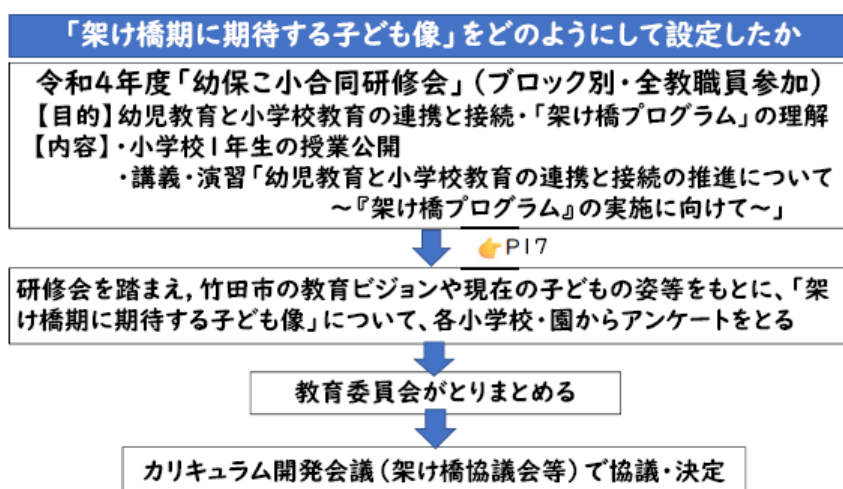
令和5年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
4月20日 15時～16時30分	・作業部会の進捗状況 ・目指す子ども像の設定 ・調査研究の計画	目指す子ども像について設定。市内4ブロックでの合同研究会の実施およびモデル園・校における公開研究会の実施決定
2月19日 15時～16時30分	・作業部会の進捗の報告 ・公開研究会の総括 ・来年度の予定	各校に幼小連携担当を置くことを決定。公開授業を各ブロックで実施することを決定

令和6年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
8月1日 15時～16時30分	・合同研修会のまとめ ・調査研究内容の報告 ・報告書の作成について	開発委員として、市内4ブロックで行った合同研修会に自由参加してもらい、その様子や感想を交流し、合同研修会の方向性について協議を行った
1月28日 15時～16時30分	・研究のめとめについて ・今後の方向性について	3年間のまとめとして、各作業部会より報告をし、来年度の方向性について確認をした

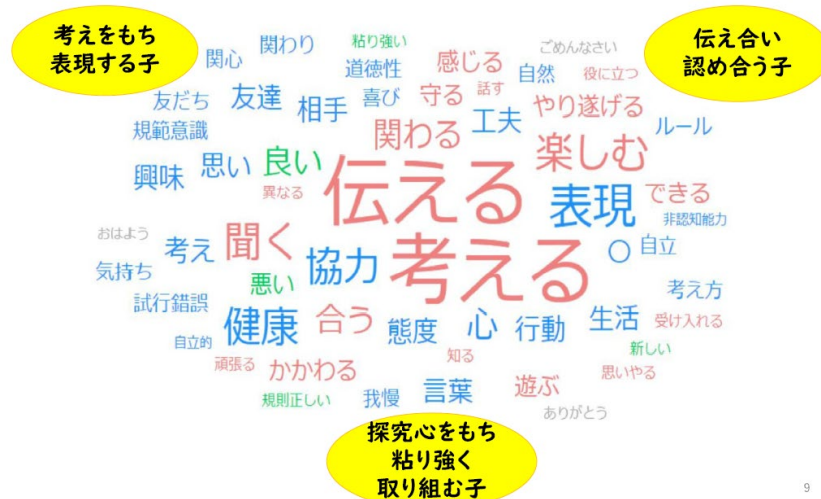
3-3. 成果と課題

<架け橋期のカリキュラムに関する議論>

- 1年目11月より市内4ブロックにおいて幼保小合同研修会を実施。
 - ・架け橋期のカリキュラムについての概要説明
 - ・「幼児期に期待される子どもの姿」を基にワークショップの実施
 - ・目指す子供像を全職員にアンケートとして聞き取り
- 2年目4月に竹田市教育ビジョンの目指す子ども像と照らし合わせながら、設定した。



(アンケートの結果)



竹田市の架け橋期の目指す姿から、架け橋期の資質能力を設定した。それをカリキュラムの柱として位置づけた

その後、幼稚園、小学校に分かれて、架け橋期のカリキュラム作成を行った
詳細は別添資料参照

<会議設置による成果と課題>

第3回カリキュラム開発会議に置いて、目指す子ども像を協議した。大学教授や学校職員、幼児教育センターより意見が出され、決定されようとした。そこで、ここまでの話し合いについて、保護者に意見を求めた。「よくわからない」「わたしたちはこの会議に必要なのか」と意見が出された。また、校長より「汎用性の高いものでなければ浸透しない」との意見も出された。幼児教育施設関係者からは「作成に向けて自身がない」という意見が出された。誰にでもわかり、誰にでもできるカリキュラムを作成することが立場を超えて協働できるということが確認された。

市民に対してわかりやすいカリキュラムに向けて、有識者及び保護者、学校職員が参加し、そこで協議することが重要であることが確認された。その後の開発会議では、すべての参加者が発言する形で進められた。

「架け橋期のカリキュラム開発会議の設置

「『竹田市架け橋期のカリキュラム』開発会議」(教育長参加)

【構成員】18名

- ・モデル校 校長・教諭
- ・モデル園 副園長・教諭
- ・こども園代表 園長(市町村幼児教育アドバイザー)
- ・保育所代表 所長(市町村幼児教育アドバイザー)
- ・私立幼稚園代表 園長
- ・大分大学教育学部 准教授
- ・大分県教育庁幼児教育センター 2名
 - ＊うち1名「架け橋期のコーディネーター」
- ・作業療法士(「体づくりプログラム」を行うため) 2名
- ・保護者代表(園・小学校各1名) 2名
- ・社会福祉課(課長を含む) 2名
- ・学校教育課(課長を含む) 2名



担当部局どうしの連携

竹田市幼児教育アドバイザーの活用

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

「架け橋期のカリキュラム開発作業部会」の設置

「『竹田市架け橋期のカリキュラム』開発作業部会」

※主としてモデル校・園が作業

【構成員】場合によっては、校・園に分かれて作業

- ・モデル校
校長（園長兼務）・教頭（副園長兼務）・教務・1年生担任
- ・モデル園 全員
- ・県教育庁幼児教育センター
（架け橋期のコーディネーター）
- ・学校教育課指導主事

※拡大作業部会の場合

【構成員】

- ・開発会議委員の幼児教育施設の長 3名
 - ・モデル校園代表 1名
 - ・県教育庁幼児教育センター 2名
 - ・学校教育課（課長を含む）
 - ・社会福祉課
- ⇒作業部会の途中経過を委員の大分大学教育学部麻生教授に報告し、指導・助言を得る



3

架け橋期のカリキュラムの作成までに （南部幼小モデル校・園）

1. 事例をとる

2. 遊びや学びのプロセスを見取る

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を 手掛かりに資質・能力等を見取る

見える化

互いの理解

4. 互いのつながりを考える

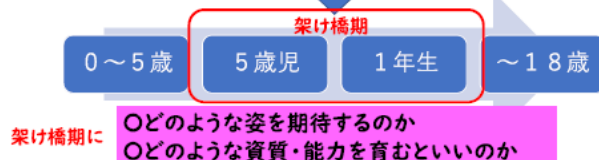
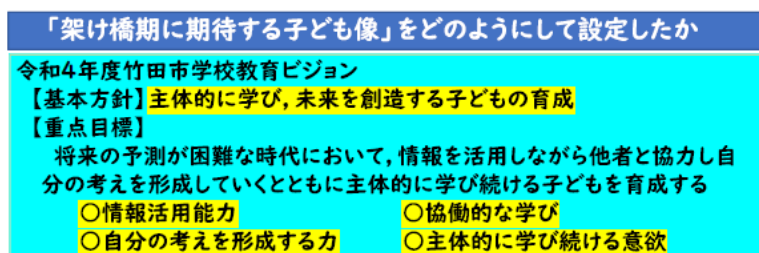
4

架け橋期のカリキュラムの作成について （南部幼小モデル校・園中心に）

①②③④⇒竹田市で共通しておこなうもの
「竹田市架け橋期のカリキュラム開発会議 作業部会」で作成したもの

⑤⑥⑦⇒各園・小学校で作成するもの
現在していることを各園・小学校で見直し、共通理解を図りながら作成するもの

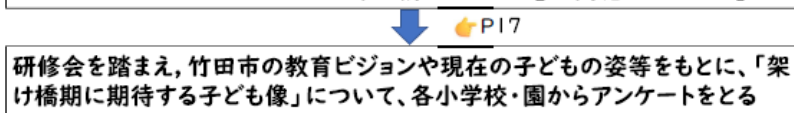
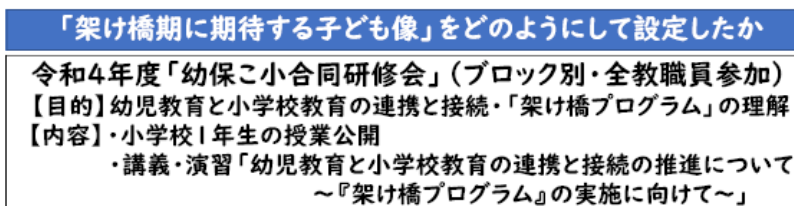
具体的な作成手順として



①「架け橋期に期待する子ども像」（共通）

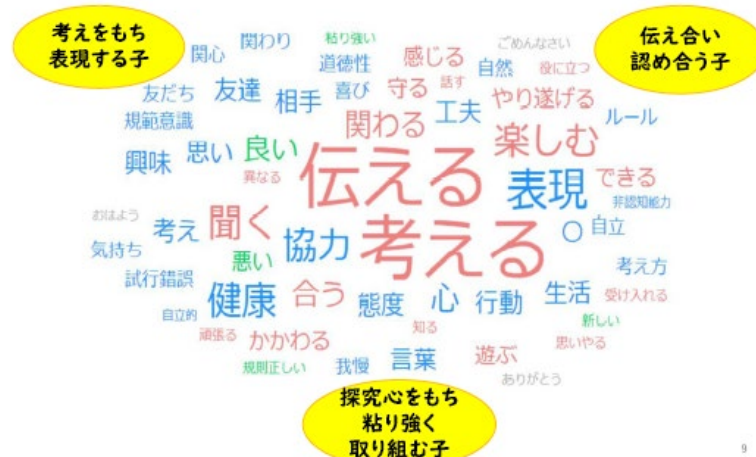
「架け橋期に期待する子ども像」を市町村の教育ビジョンや現在の子どもの姿等から設定する

主体的に学び未来を創造する子ども ～将来の予測が困難な時代において、情報を活用しながら他者と協力し自分の考えを形成していくとともに主体的に学び続ける子どもを育成する～
○重点目標：○情報活用能力 ○協働的な学び ○自分の考えを形成する力 ○主体的に学び続ける意欲
考えをもち表現する子 伝え合い認め合う子 探究心をもち粘り強く取り組む子



教育委員会がとりまとめる

カリキュラム開発会議（架け橋協議会等）で協議・決定



②「架け橋期に期待する子ども像」の具体化（共通）

「架け橋期に期待する子ども像」に向けて、
幼児期の終わりまでにどのような資質・能力を育みたいか、子どもの姿を具体化する
 「考えをもち表現する子」
 「伝え合い認め合う子」
 「探究心をもち粘り強く取り組む子」

考えをもち
表現する子

○ものの性質や仕組みなどを感じ取ったり気づいたりする（知・技の基礎）
 ○豊かな言葉や表現を身につける（知・技の基礎）
 ○経験したことや感じたこと、考えたことなどを表現する（思・判・表の基礎）

伝え合い
認め合う子

○自分と異なる考えに気づき、考えを共有する（知・技の基礎）
 ○自ら判断したり考え直したりする（思・判・表の基礎）
 ○おどろきなど

③遊びや学びのプロセス（共通）

「架け橋期に期待する子ども像」の育成に向けて、
 遊びや学びのプロセスをどのように深めていくのか

遊びや生活を通して総合的に学ぶ	表現する子	各教科の内容を学ぶ
共通の目的に向かって、互いの思いや考えを受け入れながら、自分たちで遊びを深めていく楽しさを感じる	○ものの性質や仕組みなどを感じ取ったり気づいたりする（知・技の基礎）	人と関わる楽しさや喜びを感じ、学びの意欲をもち、粘り強く取り組む

④5歳児に必要な経験や体験（共通）

②のような子どもたちを育てるには、5歳児には
 どのような経験や体験が必要なのか

体を十分に動かして、いろいろな運動や遊びに迷って取り組む（戸外で、友だちと一緒にするなど）
友だちの話や聞き、互いの思いや考えを受け入れながら、友だちと目的を共有し協力することを楽しむ（考える、伝え合う、工夫する、認め合う、協力する、見通しをもつ、折り合いをつける、ルールの共有など）
数量や図形、文字などに親しみ、遊びや生活の中で使う楽しさを感じる
身近な自然や動植物に興味や関心をもち、関わる（世話をする、遊びに取り入れる、仕組みに気づくなど）
絵本や物語などに親しみ、言葉やイメージを豊かにする
様々な出来事や素材に触れ感じたことや考えたことを表現して楽しむ（歌う、楽器を使う、かく、つくるなど）

⑤各園で展開される主な活動（各園で）

④を踏まえ、ねらいに基づいた各園で展開される
 主な活動（幼小交流活動を含む）

*【 】は遊び・活動例

*◇遊びの中で期待する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（到達目標ではない）

図定器具や運動器具に興味を持ち、体を動かして遊ぶ楽しさを感じる	自分なりに考えたり、気づいたことを友だちと伝え合ったりしながら、試行錯誤して遊ぶことを楽しむ	身の自然物や遊びに取り入れ、友だちと協力して楽しむ。また、身の自然物や遊びに取り入れ、友だちと協力して楽しむ。	共通の目的に向かって友だちと協力して遊びを深めていく楽しさや喜びを感じ、学びの意欲をもち、粘り強く取り組む
【お正月のあそび】 お正月のあそび お正月のあそび	【シャボン玉遊び】 シャボン玉遊び シャボン玉遊び	【お正月のあそび】 お正月のあそび お正月のあそび	【お正月のあそび】 お正月のあそび お正月のあそび

⑥指導上の配慮事項(各園・小学校で)

○園 保育者の援助・環境の構成等

○小 教師の指導・環境づくり等

***日頃の実践をもとに考える**

***「期待する子ども(像)」の育成に向けてどうすればいいかも考える**

各園

□活動を展開するにふさわしい環境の構成(遊具・用具・素材の種類、数量、配置等)
 ◇子どもの興味・関心を引き出す導入の工夫
 ◇見通しをもったり、振り返ったりできるように場を設ける
 ◇見守る、一緒に活動する、共感するなど場に応じた言葉かけや援助を行う

各小学校

□安心して学べる環境構成→見通しをもってできる・視覚的に理解できる・
 ◇「スタートカリキュラム」の時期は安心して学習がスタートできるように、音聲
 ◇関わりを広げる支援→ペア・グループ・学級・学校全体へ ◇体験活動
 ◇課題への出合わせ方、児童の意識の流れ、振り返りを大切にしたい指導計画
 ◇「園ではどうしてた?」「どう思う?」「どうしたらいいと思う?」など経験の想

⑦家庭や地域との連携(各園・小学校で)

○幼児教育と小学校教育のつながりや「架け橋期のカリキュラム」について、どのように理解を図るか

○園・小学校で共通して行うこと

○市全体で行う「体力づくりプログラム」(たけたん体操)の普及⇒共通

幼児教育と小学校教育のつながり、「架け橋期のカリキュラム」等についての理解(保護者会、入園・入学説明会、学校運営協議会、通
 竹田市こども「せいかつTOP10」(幼児版)の活用 「南小っ子 生活の約束」
 体力づくりプログラム(「たけたん体操」の普及)

竹田市架け橋期のカリキュラム（南部幼小モデルプラン） Ver.4

[illegible]

R5.6.23現在

17

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

- (1) カリキュラムを基に、モデル園・校で実践。保育公開、授業公開
- (2) 作業部会で実践の振り返り
- (3) 「遊び（学び）のプロセスとしてまとめる。
- (4) カリキュラムの修正（現在 Ver. 4）

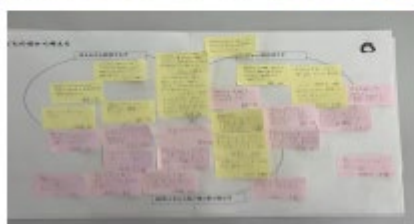
架け橋期のカリキュラムの評価・改善 (南部幼小モデル校・園にて)

「竹田市架け橋期のカリキュラム」(南部幼小モデルプラン)の 検証

南部小学校・幼稚園の公開授業・保育

及び幼小合同研修会(R5年6月・11月)

- ・「期待する子ども像」に沿った授業・保育の検証 📌P17
- ・「竹田市架け橋期のカリキュラム(南部幼小モデルプラン)」改訂版の発行 📌P3
- ・遊びや学びのプロセスシート発行 📌P21
(南部幼稚園・小学校の実践からプロセスと資質・能力を見取ったもの)
- ・幼小「学びのつながり」シート(南部幼稚園)発行(協働) 📌P41
⇒「学びのつながり」の見える化, 小学校・家庭・地域への理解促進へ



架け橋期のカリキュラムの評価・改善 (南部幼小モデル校・園にて)

南部幼稚園・小学校の教育課程の見直し・作成

○南部幼稚園教育課程案の見直し

・項目の検討 ・教育課程案作成

👉 P13

○南部小学校教育課程案(1年)の見直し

・単元配列表(1年)の付加・修正

・スタートカリキュラムの見直し(幼小で)

・幼小交流活動計画の頁作成

👉 P14

👉 P15

 P35

評価・改善を継続

架け橋期のカリキュラムの作成に向けて (市内全校・園にて)

ブロック別研修会の実施

各園・小学校の教育課程・指導計画等の作成

○各園カリキュラムの作成

・施設長等研修会(拡大作業部会)の実施

・モデル案をもとに自園のカリキュラムを見直し,作成

○各小学校カリキュラムの作成

・モデル案をもとに自校のカリキュラムを見直し,作成

互いのカリキュラムの交流・幼小交流活動の計画・位置づけ等
⇒「架け橋期のカリキュラム」の各校・園版作成（ブロック別）

見直しの視点

見直しの視点①

園で展開される主な活動
について

・プロセスや必要な体験に沿ったものになっているか？
・期待する子ども像に向かっていくものになっているか
(資質・能力が育まれるようなものになっているか)？

見直しの視点②

園・小どちらも「期待する子ども(像)を育てるために必要な「指導上の配慮事項」は他にはないか？

見直しの視点③

幼小の連携についても記入
 した方がいいのではないかと
 ⇒項目の追加

見直しの視点①

小学校の生活科を中心
 とした単元構成について
 ・幼児期からつながる「幼
 児期の終わりまでに育っ
 てほしい姿」
 ・合科的・関連的指導
 等の見直し

見直しの視点④

「家庭や地域との連携」の取組は他にな
いか？

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

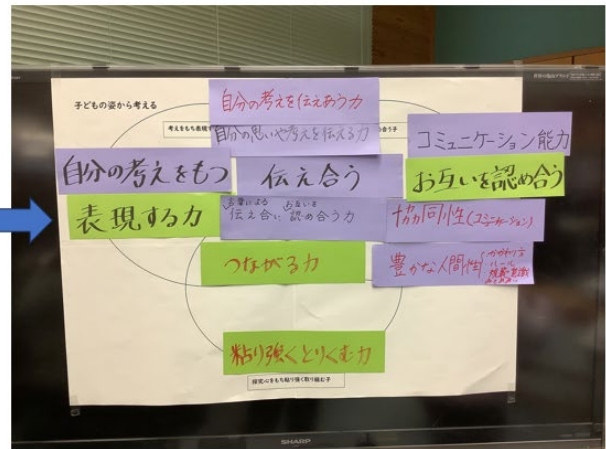
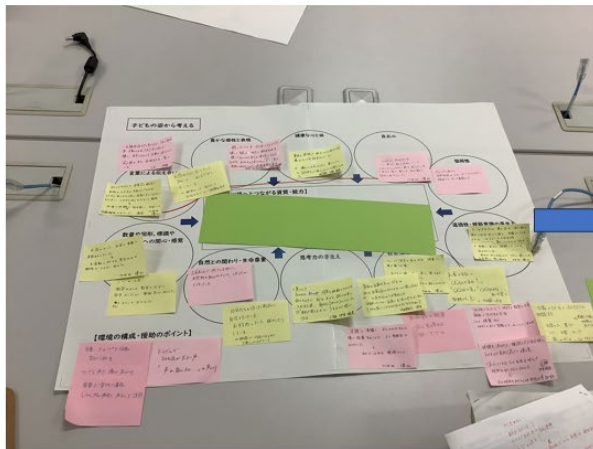
令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
10月7日	幼小接続地区別合同研修会	対面	小学校教諭 幼稚園教諭 保育士	幼保小の架け橋プログラムの実施に向けて
10月18日	小学校1年部会	対面	小学校1年担任	スタートカリキュラムについて
10月24日	小学校1年部会	対面	小学校1年担任	スタートカリキュラムについて
11月～2月	地区別合同研修会 (全7か所)	対面	小学校全職員 幼児教育施設 職員	来年度ののカリキュラム作成に向けて、目指す子供の姿について
令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月23日	竹田市公立幼稚園 全体研修会	対面	幼稚園職員	カリキュラムの説明、ワークショップ
6月23日	南部小学校公開研究 発表会	対面	小学校 幼児教育施設 開発委員 各市町村	授業公開 研究協議 カリキュラムの説明
9月6日	幼小接続地区別合同 研修会	対面	小学校教諭 幼稚園教諭 保育士	説明「幼保小の架け橋プログラムについて」 講義・演習「架け橋期の教育の充実に向けて」
9月8日	竹田市教育保育施設 長会議	対面	幼児教育施設 園長・職員	カリキュラムの説明、ワークショップ
11月16日	南部幼稚園公開研究 発表会	対面	小学校 幼児教育施設 開発委員 各市町村	授業公開 研究協議 カリキュラムの説明
11月21日	地区別研修会 D	対面	小学校、保育 所、こども園	小学校1年生授業公開。研修「保育所、こども園の大切にしていること」
11月21日	地区別研修会 C	対面	小学校、保育 所	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
1月27日	地区別研修会 B	対面	小学校、保育 所	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
2月2日	地区別研修会 A	対面	小学校、保育 所	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの

				説明」ワークショップ
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
5月23日	合同研修会 直入小	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
5月29日	合同研修会 南部小	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
5月29日	合同研修会 都野小	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「体つくりの説明」ワークショップ
6月14日	公開保育 竹田保	対面	保育士	4歳児保育参観、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
6月21日	合同研修会 竹田小	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
7月19日	公開保育 玉来保	対面	保育士	4歳児保育参観、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ
10月7日	幼小接続地区別合同研修会	対面	小学校教諭 幼稚園教諭 保育士	説明「幼保小の架け橋プログラムについて」 講義・演習「架け橋期の教育の充実に向けて」
10月21日	合同研修会 祖峰小	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「体つくりの説明」ワークショップ
11月6日	合同研修会 南部幼	対面	小学校、幼児教育施設、開発委員	小学校1年生授業公開、研修「架け橋カリキュラムの説明」ワークショップ




<研修の成果と課題>

保育（授業）参観の見取りから「子どもの姿」と「指導」について、明らかにし、育んでいく資質・能力をグループで協議していく。



授業参観カード

校・園・所名() 名前()

＊子どもの様子、教師の指導・環境づくりなどをよく見て、付箋に記入してください。事後の協議で使用します。

- 例のように、横向き、横書きで記入
- 1つの項目を1枚の付箋に記入
- 一番下に校・園・所名、名前を記入

◎黄色のカード⇒子どもの姿

子どもが主体的に学んでいると感じた姿を記入

【例】
気付いたことを自分から進んで友達に伝えていた。

県幼児教育センター 武津



◎ピンクのカード⇒教師の指導・環境づくり

教師の指導・環境づくりで効果的だと思うことを記入

【例】
「5つの調べるカード」により、観察の視点を明らかにしたこと、子どもたちの気付きが広がった。

県幼児教育センター 武津



【参加者の感想】

○今回、初めて公開授業、研究協議に参加させていただきました。小学1年生の子どもが友達の話の聞くことができている姿に感心しました。今回の南部幼小のカリキュラムを元

に、今の保育（あそび）を再度職員で考えてみる機会を作っていこうと思います。（保育所）

○生活科の授業を見て、幼児教育に近いなと感じ、幼小の連携・接続を感じられる提案授業でした。また一つ小学校を知ることができ、日々の保育につなげることができそうです。架け橋期のコーディネーターのお話もわかりやすく、架け橋期のカリキュラム作成の流れを確認でき、整理ができた気がします（保育所）

○昨年度まで園にいた子どもたちののびのびとした姿を見て安心しました。小学校の先生と意見交換でき、勉強になりました。（こども園）

○幼稚園で行ってることや幼稚園で体験したこと、学んだことを授業に取り入れてくださっており、子どもたちが生き生きと学習している姿、主体的に活動する姿が見られて、素晴らしい授業でした。私も幼稚園の保育について見直したいと思いました。また、グループワークでは小学校の先生方と実りある協議ができ、今後も続けていきたいと思いました。（幼稚園）

○年長児がいないのですが、架け橋プログラムにつながるような保育の活動に取り組んでいきたいです。（保育園）

○今まで以上に幼保小が連携や協働しやすい環境を作っていただけること、とてもありがたいと感じています。（保育園）

○架け橋期にねられたカリキュラムを組めば、1年生でも、考えを持ち表現でき、伝え合い、認め合い、探究心を持ち、粘り強く取り組めると実感した。自分の学級でも「五感」を意識して、様々なことに実践していきたい。（小学校）

○授業の中で自分たちの経験を振り返った発言をいかに引き出せるか、子どもたちも「知ってる！経験してる！」と自信を持って伝えられる事がよく分かる温かい授業でした。（小学校）

○「校区でつながる機会を早く持ちたいな」「子どもを中心に話をしていくとどんなものが生まれるかな」となんだかワクワクしてきました。良い学びをさせてもらいました。（小学校）

○授業を通して、子どもたちが安心して学びに向かっていること、表現し伝え合おうとしているところ、とても勉強になりました。協議では保育園の先生ともお話できて、子どもを見る視点についてなど、たくさん知ることができました。（小学校）

○今まで、「園は園」「小学校は小学校」という意識がどこかにありました。でも、今日の授業やワークショップを通して、子どもにとってはつながりがあるので、そのつながりを最大限活かしていきたいと思いました。（小学校）

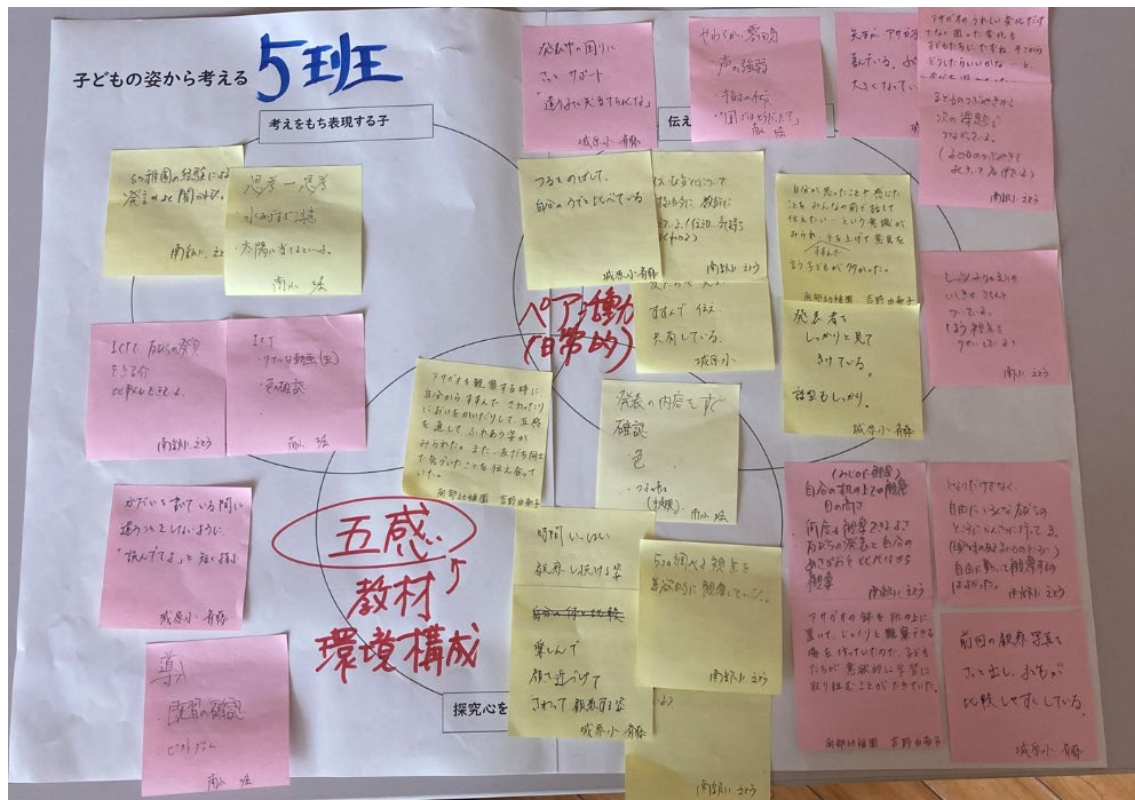
○幼保こ小のつながりや継続的な学びを見ることができました。子どもたちの気持ちや考えがたくさん出てきて、とても良い授業だと思いました。スタートカリキュラムだけでなく、2年間というスパンで考えられるよう学びを仕組んで行く必要があると感じました。（小学校）

○子どもを真ん中にして、まずは学校種を超えて、教職員、関係者がつながることの大切さ

を改めて感じました。（小学校）

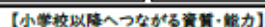
○幼児期のプログラムをどのように小学校につなげていくのかという新しい学びがありました。参加して良かったです。（行政関係者）

○公開授業での先生の言葉かけにより、子どもが生き生きと活動する姿がとても印象的でした。ワークショップで小学校の先生と幼児教育施設の先生が普段どうしているかという話をしていて、つながりを生む良い時間だったと思います。今日学びを活かして進めていきます。（行政関係者）



○遊びのプロセス：幼稚園の遊びの様子をまとめたもの

【遊びのプロセス】＊遊びの中で育まれている資質・能力を次のように表している

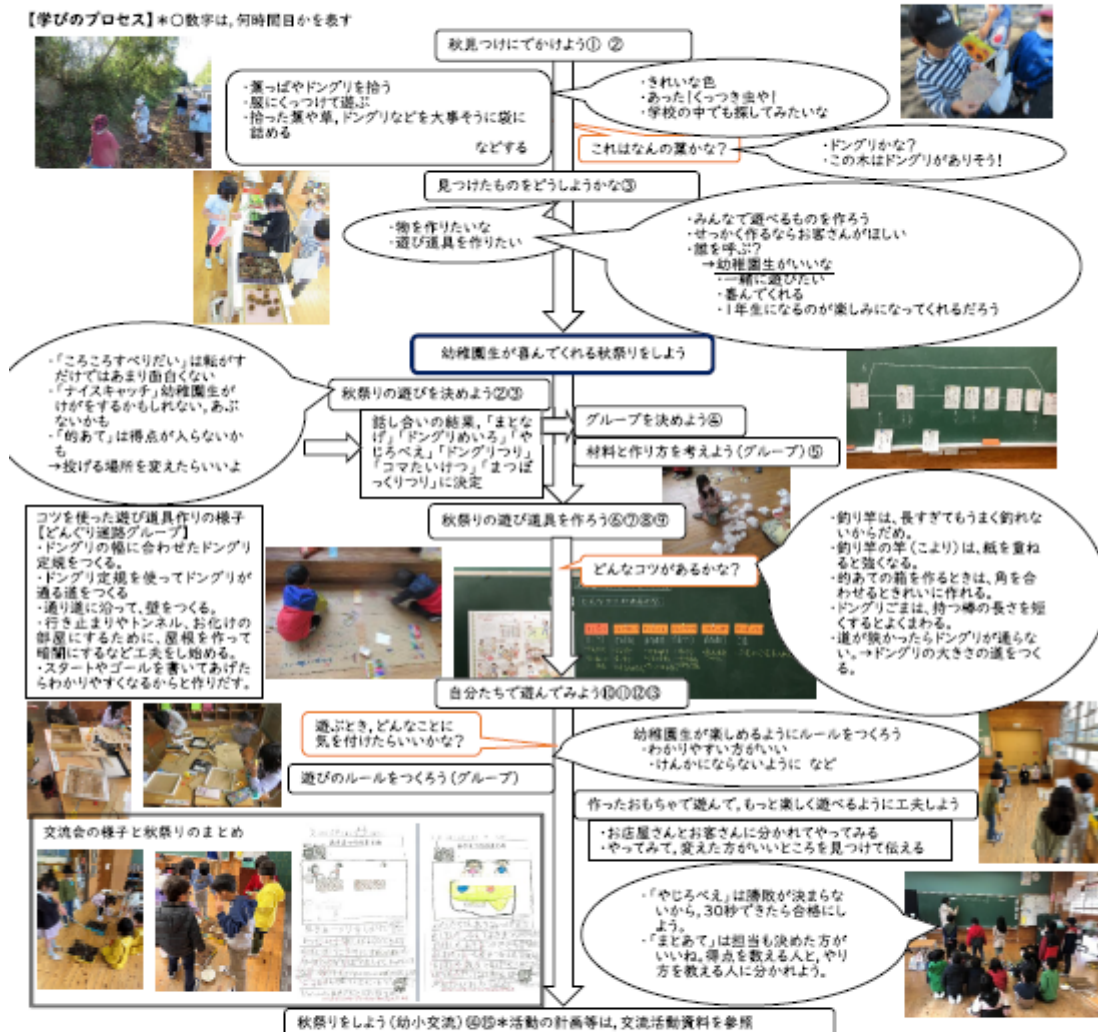
25

○学びのプロセス：生活科での学びの様子をまとめたもの

学びのプロセス～小③～竹田市立南部小学校1年生 10月～11月 単元名「きせつと なかよし あき」(15時間)

単元目標	秋の自然を諸感覚を使って観察したり、自然物を使って遊んだりする活動を通して、秋の特徴や他の季節との違いを見つけることや、それらを使って遊ぶ方法を考えたり、遊びを通して工夫したりすることができ、自然や生活の様子の変化、自然のおもしろさや不思議さ、野原や公園のルールやマナーを身につけて遊ぶことについて気付く。季節を取り入れて遊びや生活を楽しく創り出すことができるようになる。
内容	身近な人々、社会及び自然にかかわる活動に関する内容 (4) 公共物や公共施設の利用 (5) 季節の変化と生活 (6) 自然物を使った遊び 自分自身の生活や成長に関する内容 (8) 生活や出来事の伝え合い
幼児教育からのつながり	自然との関わり・生命尊重 協同性 社会生活とのかわり

【学びのプロセス】※○数字は、何時間目かを表す



長い時間をかけての活動だったが、「幼稚園生が喜んでくれる秋祭りをしよう」というめあてのもと、子どもたちは自分たちで話し合い、工夫し、遊びを創り出そうとしていた。単元の振り返りでは、「作るのが楽しかった。」「幼稚園生が楽しかった。」と喜んでくれた。」「ルールを考えるのが楽しかった。」「いろんな秋が見つけた。」といった感想が出された。どの子も、大変なこともあったがお客様が喜んでくれたことが自信につながっている様子が見られた。

指導上の留意点	○自然の中で遊んだり、自然のものをたくさん見つけたりできるように、適した場所にて「秋見つけ」に出かける。 ○自然物を使って遊ぶ活動ができるように、見つけたものがよくわかるように展示したり、作るのに十分な時間を保障したりする。 ○「秋祭りの遊びを決める際は、思考ツールを用い、話し合いにいかせるようにする。 ○同じ遊び道具を作るグループで活動できるように配慮する。 ○道具を使うときは、安全に気を付けるように指導する。 ○作り方のヒントになるように、参考資料を用意しておく。
本単元を通して育つ資質・能力	【知識・技能】 秋の自然の中で遊んだり、自然物を使って遊んだりする活動を通して、秋の自然や生活の様子の変化、季節によって自然の環境や生活の様子が変わること、自然の面白さや自然の不思議さ、野原や公園のルールやマナーを守って遊ぶことについて気付く。 【思考力・判断力・表現力】 秋の自然の中で遊んだり、自然物を使って遊んだりする活動を通して、秋の特徴や他の季節との違いを見つけ、遊びや遊びに使うものを工夫してつくっている。 【学びに向かう力・人間性】 秋の自然の中で遊んだり、自然物を使って遊んだりする活動を通して、季節を生活に取り入れて、みんなと遊びを創り出そうとしている。
今後の学習とのつながり	○「きせつと なかよし ふゆ」 ○2年生 生活科「作ってためして」 ○3年生 理科「しぜんのかんさつ」

＜教材等の成果と課題＞

- ・遊びのプロセス、学びのプロセスを作成することにより、保育者および授業者は自分の実践と子供の遊びや学びの流れを振り返ることができ、カリキュラムの検証・改善にむけて、役立っていた。
- ・保育や授業の単元などの流れ、ねらいなどが明記されているため、カリキュラムの実践するうえで、教職員や保育士が取り組みやすくなった。
- ・遊びの重要性について、わかりやすかった。

○保護者への啓発のための資料

*毎年発行、保護者会で配付。小学校や地域の幼児教育施設と共有

⑤「社会生活との関わり」



「秋のお店屋さんごっこ」(11月)
クラスみんなでやりたいお店を相談し、利
自然物を使って商品や看板など必要なも
作ります。そして、本物のお店屋さんの様
自分たちなりに再現しながら、お店さ

《小学校では…》
自分が関心を持った情報を積極的



「表現あそび」(11月～12月)
劇のセリフや動き、リズムの隊形やポーズ
自分たちで考えを出し合い、友だちと一緒に
りあげていくことを楽しみます。12月の発
では、表現あそびをお家の人にも観てもら
さらに達成感を味わいます。

《小学校では…》
音楽や造形、身体を使った学習など、
感性を働かせ、表現することを楽しむ
活動につながります。

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

○令和4年開発会議に開発会議にて出された課題

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が策定されたが、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善あるいは幼保小の連携の手がかりとして十分機能していない。
- ・スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない。連携が行事の交流等にとどまっている。

(開発会議委員の意見 ※抜粋)

- ・なぜ竹田市が架け橋プログラムに取り組むのか
- ・知識は以前の子より多いが、集団行動ができないと感じる。何が違うのか。
- ・体の発達については、20年前は注目されていなかった。社会が変化して子どもは変わった。(所得・共働き等) 五感をしっかり使えば、体は発達する。
- ・この時期は、「愛着形成」をしっかりとすることが重要。家で愛情注がれると子どもは安定する。保護者との協働が重要である。
- ・三つの間(時間・空間・仲間)がなくなってきている。
- ・各園での学びを考えておらず、一度リセットしていた。幼児教育と小学校教育が相互を理解する事が重要。

○課題に照らして

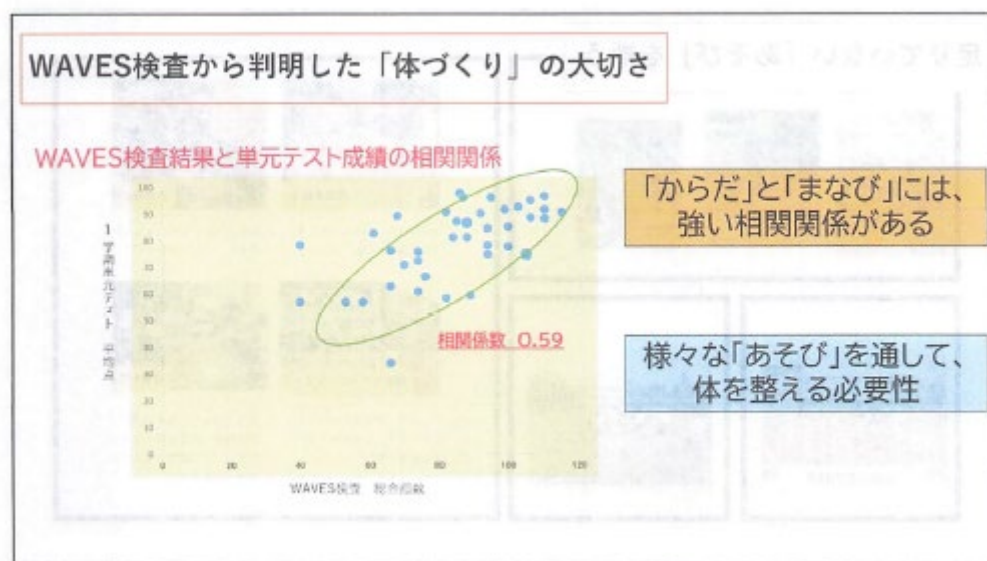
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育参観や授業参観をする際の視点となることで、連携の手がかりとして機能し始めた。
- ・全員参加のアンケートから「竹田市の期待する子ども像」を策定し、さらに、カリキュラムの南部幼小モデルとつなげたことで、幼小接続の方向性が確立されてきた。
- ・合同研修会を重ねるごとに内容の理解が図られ、小学校区単位での合同研修会が実施することができてきた。
- ・各園・各校にて、体づくりにつながる運動や遊びが実施されてきている。
- ・今後も続けていく必要性が、職員の声から上がっている

＜定量的・定性的な調査結果＞

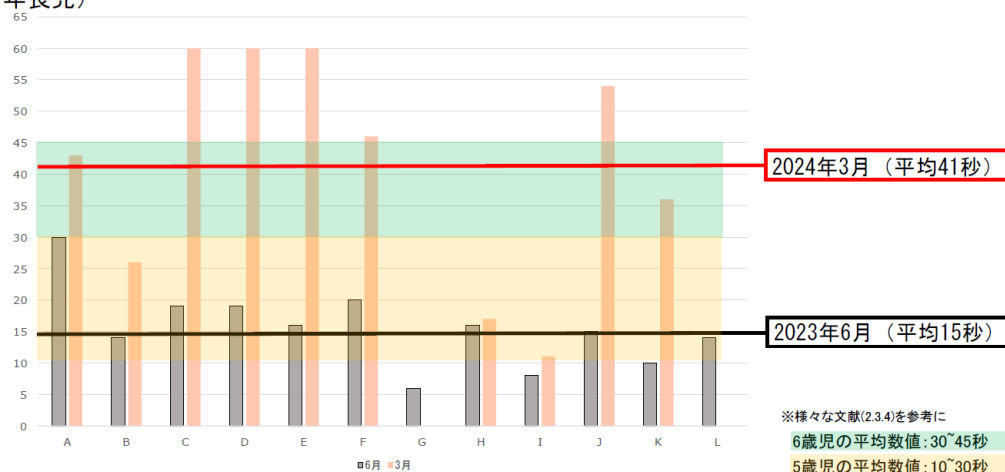
幼保小架け橋プログラムに関する「竹田市カリキュラム開発会議第2作業部会」の調査研究活動では、「タケタン体操」の効果と併せ、架け橋期（5～6歳）にどのような取組を行えば、子どもの体（認知機能）の発達を促すことができるかを検証してきた。

教育施設に対しては、専門家（作業療法士）から個々の子どもの発達状況に関する情報提供や運動のあり方など専門的な知見の提供を行った。

その結果、運動機能の発達が見られただけでなく、授業中の姿勢が改善され、落ち着いた環境で学ぶことができていた。保護者にとって育てやすい状況を作るだけでなく、家庭でも取り組める取組のため、大変喜ばれ、保護者からも望まれている取組である。



A園（年長児）



6-2. 園校における成果

<先生方の指導と子供の姿の変容>

最初に作った架け橋期のカリキュラム作成から、モデル園・校では実践を行いながら見直しを行ってきた。その中で先生の指導については、実践を通じて変容してきた。それらを効果的な指導として架け橋期のカリキュラムの「指導上の配慮事項」としてまとめてきた。

(幼児教育)

- 活動を展開するのにふさわしい環境の構成（遊具・用具・素材の種類、数量、配置等）
- ◇子どもの興味・関心を引き出す導入の工夫
- ◇見通しをもったり、振り返ったりできるように場を設ける
- ◇「どうしたい？」「どうする？」など、子どもの考えを引き出す言葉かけを行う
- ◇自分の思いを伝えたり、友だちの考えを聞いたりする場を設ける
- ◇見守る、一緒に活動する、共感するなど場に応じた言葉かけや援助を行う
- ◇友だちの姿から、良さに気づいたり、刺激し合ったりできるような言葉かけを行う

(小学校教育)

- 安心して学べる環境構成→・見通しをもってできる・視覚的に理解できる・協働的に学べる
- ◇「スタートカリキュラム」の時期は安心して学習がスタートできるように、音楽や読み聞かせ等を1時間目に行う
- ◇関わりを広げる支援→ペア・グループ・学級・学校全体へ
- ◇体験活動を取り入れる
- ◇課題への出合わせ方、児童の意識の流れ、振り返りを大切にした指導計画
- ◇「園ではどうしてた？」「どう思う？」「どうしたらいいと思う？」など経験の想起・思考を促し、交流し合う言葉かけを行う

とくに、「どうしたい？」「どうする？」「園ではどうしてた？」などの言葉かけは、幼児教育施設や小学校1年生の担任に限らず、小学校のその他の学年の先生も使うようになり、主体的な活動が増えてきている。研修等では、小中連携での応用まで声が聞かれるようになってきた。

＜保護者の反応＞

（開発会議に参加した保護者の感想）

- 当初事業説明を受けた時は、まったく理解ができず、保護者には関係のない話ではないのかと思っていたが、会議に参加していくことで事業の趣旨や目的、子どもたちの目指す姿が理解でき、先生方だけでなく、保護者の理解・協力も必要だと感じました。
- このカリキュラムがスタンダードになるまでは、先生方、特に一年生の担任の先生の負担は多くなるのではと感じます。幼保の学び、それを踏まえての小学校での教育。今後も幼保小の交流、先生方も含めて継続し、子どもたちに係る全ての人達が協力していければと思います。
- 2年間しているとわかってくるもんだな。そういう趣旨でそういう取組をしているんだ。保護者も理解できるんだなと思いました。しかし、そこまで来るのに、すごく時間が掛かります。課題としては、今後も子どもを取り巻く様々な家庭環境を考えながら保護者にきちんと伝えていく努力をすることだと思います。保護者にとってわかりやすい取組にする必要があります。

7. 今後の課題と展望

(開発会議の委員の意見)

- 1年目はカリキュラムを作成する事が、目的と考える発言が散見されたが、年度を重ね、子どもの学びを円滑に接続する事が、目的であるという事が浸透してきていると感じる。それを支えたのが、合同研修会だった。担当者だけでなく、多くの職員の参加を促したのが、効果的だったのではないだろうか。2年目からは、各校区で合同研修会が企画・運営されはじめ、持続的な取組への布石となっており、これをより自律的なものへとすることが大事だと考える。(小学校)
- 幼保小架け橋プログラムに参加して幼児・児童に対する意識が変わりました。入学時の児童の発言や行動を「こうしなければ」という教師側の指導ではなく「どうしたい？」と児童主体に考えられるようになりました。カリキュラムを作成する中で、幼児期の育ちを生かす難しさ、そして大切さを感じました。またこれからも、校種を跨ぐ取組のため、市教委の支援も欠かせないと思います。今後も、この取組が幼保小中一貫と言われるような竹田市の教育の礎になる事を期待しています。(小学校)
- 幼児期から小学校までの育ちや学びを連続性という視点から捉え直し、カリキュラムを作り上げたことが大きな成果と考えています。また、架け橋期に育てたい資質や能力を共有することで、保育活動や学校での学習活動のめざす方向性がより明確になったのではないかと思います。
- 本研究を通して小学校教職員の意識にも変容が見られ、幼児教育施設での遊びを通した学びを意識した指導が見られるようになりました。今後は、この取組が持続的に取り組まれるようにその体制づくりをしていきたいと考えています。(小学校)
- 幼児教育保育施設で子どもを預かった時から連携は始まっている。基本的な生活習慣から始まり。様々な体験をすることが、それ以降の学びに向かう力の土台に繋がっていく。一人ひとりの子どもに目を向けて寄り添い、支えていくことを考えていながら、架け橋期の子どもたちの姿について幼保小の立場を超えて話し合うことが何より大切だと思う。3年間のモデル地域としての取組は終わるが、合同研修会などは引き続き開催して、みんなで学ぶ機会を作ってほしい。卒園児の小学校での様子なども聞いて、自園の保育や教育についてもふりかえりたい(幼児教育施設)
- この3年間の事業がどれだけ竹田市の教育保育施設に浸透し、継続していけるかが課題になると思います。幼保小でカリキュラムを作成し、それぞれの地区で交流会や連絡会を進めていき、振り返りや意見交換を充実させていくことが架け橋の第一歩になると思います。まだまだ幼保小の連携について理解や知識が浅いので、協議会でも研修や公開保育を実施し、子どもの学びや育ちについて勉強できる機会を設けていきたいです。(幼児教育施設)
- 3年間を振り返って、質の高い専門的支援ができたか不安ですが、私にとっては良い経験であり、子どもたちの成長に携わることができ、嬉しく思います。一言でいうと、「楽しかった」です。この活動は、専門家が幼保小に入るだけでは前に進みません。先生方の協力があってこそ、子どもたちの成長につながる活動だと思います。3年前から比較すると、先生方が専門的な視点で子どもの話をする事が増え、子どもの成長だけでなく、先生方の吸収力の高さにも驚きました。ご協力にとっても感謝しています。今後も継続して、このような活動が

できたらと思うと同時に、必要性も感じています。（作業療法士）

○国のモデル地域として令和４年度から始まった「架け橋期のカリキュラム」の開発は、南部幼稚園と南部小学校をモデル校園に設定したことが大きなポイントだったと思います。この南部幼小のモデルカリキュラムが先行事例となり、竹田市のみならず、大分県全体の「架け橋期のカリキュラム」の充実につながっています。とても感謝しています。これからも、架け橋期の教育の充実に向けて、継続・進化させていくことを願っています。
（県幼児教育センター）

○これまで、竹田市の架け橋期のコーディネーターとして、モデル校園である南部幼小の皆さんと一緒に試行錯誤しながら「架け橋期のカリキュラム」作成に取り組んできました。作って終わりではなく、このカリキュラムを真ん中に置いて、園と小学校が協働して子どもたちの学びをつないでいくことが大切です。「しんけん遊ぶ子」から「しんけん学ぶ子」へ、「つなぐ・つながる」を合言葉に、持続可能な取組となることを願っています。
（県幼児教育センター・架け橋期のコーディネーター）

○自治体が掲げる目指す子ども像を「幼児教育施設」と「小学校」が共有し、その実現に向けて架け橋期カリキュラムを作成することで、個々の学校園に留まらず、竹田市全体での取組として進めることができたと思います。今後は、モデル校園の実践を踏まえて作成された架け橋期カリキュラムを踏まえ、すべての校園でカリキュラムの作成・実施がなされることを期待します。そして、今回の事業をきっかけに、竹田市で架け橋期カリキュラムの作成、実施、改善のサイクルが「文化」として根付くことを願っています。（大学教授）

8. まとめ

3年間の取組をまとめると

1. 取組の進展と課題

- 認識の変化：初年度はカリキュラム作成が主目的だったが、年度を重ねるごとに「子どもの学びの接続」が目的であるという共通認識が広まった。
- 合同研修会の効果：多くの職員が参加する合同研修会が、認識の深化と持続可能な取組の基盤を築いた。
- 持続的な運営：各校区での研修会運営が進む中、自律的な活動への移行が重要。

2. カリキュラム開発の成果

- 資質・能力の共有：架け橋期に育てたい資質や能力が明確になり、幼児教育と小学校教育の連携が深まった。
- 「遊びを通した学び」の意識浸透：幼児教育の視点を理解し、小学校教員の指導意識が変容。
- 継続の課題：事業が終了後も持続的に浸透させるため、交流会や連絡会の充実が必要。

3. 幼児教育と小学校教育の連携

- 幼児の力の理解促進：小学校教員に対し、幼児の持つ力を知ってもらうことが重要。
- 生活習慣の重要性：基本的な生活習慣の定着が、学びの土台となる。
- 医学的知見の活用：乳幼児期からの運動プログラムが、バランス能力向上に寄与。

4. 多職種協働の重要性

- 専門家と現場の連携：保育・教育現場の協力が、取組成功の要因となっている。
- 架け橋期カリキュラムの意義：園と小学校の協働により、継続的な学びの接続が可能。
- 障がい児支援の必要性：障がいの有無に関わらず、切れ目のない支援の継続が不可欠。

5. 今後の方向性

- 全市的な取り組み拡大：竹田市全体の園・学校に展開し、自治体の目指す子ども像の共有が求められる。
- 保護者の理解と協力：取組の意義が徐々に伝わりつつあるが、家庭環境に応じた情報発信の工夫が必要。
- 小学校教員の負担軽減：幼保小の協力により、小学校1年生担任の負担軽減が期待される。

以上のような成果と課題が明確になってきた。

子供の関わるすべての人が立場を超えて協働していくには何よりもお互いを知ることが重要で、一番はじめにすることでもある。そのためには、まずは、幼児教育施設また、小学校への参観し、子供の姿から指導を振り返る事ができるようすすめることが重要であり、その日程調整等が困難に思えるが、取組が進む最大の効果を生むことがわかったことがこの3年間の最大の成果である。

それを踏まえ、持続的な展開に向けて、来年度の方向性として、

「たけたんスマイルブリッジプロジェクト」として架け橋期のカリキュラムを展開していく

(具体的取組)

○幼小連携担当による合同研修会の日程調整（４月）

○スタートカリキュラムの検証（１年部会）（５月）

○各小学校区による合同研修会①（授業参観＋協議＋研修）（５～６月）

○新たなモデル校、モデル園による授業公開研究会

○合同研修会②（保育参観＋協議＋研修）（８～１１月）

○作業療法士による体づくりの取組「あそびの森 Taketan Play Forest」：全園・全校

○地域保護者への啓発

○幼保連携の推進：竹田市幼児教育アドバイザーによる訪問支援